

様式 C-7-1

平成24年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号

3	2	6	0	4
---	---	---	---	---

 2. 研究機関名 大妻女子大学
3. 研究種目名 基盤研究(B) 4. 研究期間 平成22年度～平成25年度
5. 課題番号

2	2	4	0	2	0	3	5
---	---	---	---	---	---	---	---
6. 研究課題名 アジアメガシティの多層化するモビリティとコミュニティの動態に関する経験的研究

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
4 0 2 4 0 3 4 5	ヨシハラ ナオキ	社会情報学部	教授
	吉原 直樹		

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名
5 0 1 6 4 8 3 5	ハセベ ヒロシ	東北大学・経済学研究科（研究院）	教授
	長谷部 弘		

9. 研究実績の概要

これまでのフィールドワークによって得られた知見およびシンポジウム等による研究成果の開陳・交流を通して、グローバル化の進展とともにアジア・メガシティとして成長著しいデンバサルおよびジャカルタを事例として、多層化し分極化するヒトの移動と複雑化する地域社会の位相を明らかにした。とりわけ日本人社会と地元コミュニティが交差するところで、さまざまなリスクに向き合いながらセーフティネットの構築にいそむ人びとの生活世界の色鮮やかな断面を浮き彫りにした。同時に、グローバル化に対する地元社会のリアクションが、アジェグ・バリ（バリ復興運動）のような内向的なローカリティの主張として立ちあられ、そのことが日本人社会を含むバリ・コミュニティに対立と不和をもたらしていることを明らかにした。まさに急速にハイブリッド化する社会の汎世界的な局面が析出されるに至った。

なお、本研究によって移民に関する新たな知見も得られた。移民は、これまでどちらかという、ナショナルリティ（国歌/国家的なもの）に回収されていくもの、そしてそこに強制的契機をみるという捉え方がなされてきた。しかし本研究によって、移民、とりわけ「ライフスタイル」移民といわれるものが、ナショナルな機制に必ずしも制約されないこと（それは、モビリティが個人の意思によるボーダレスなフローに基づいていることから派生している）、同時にポストコロナルの地層に深く足を下していることが明らかにされた。